

法要

法要とは故人のために供養追福の行事をいいます。法要というと何か面倒なことのように考えがちですが故人を偲ぶのによい機会ですから簡素であつてもなるべく営みたいものです。

初七日から百ヶ日

初七日	(亡くなった日を含めて)	七日目)	
二七日	(”	十四日目)
三七日	(”	二十一日目)
四七日	(”	二十八日目)
初月忌	(一ヶ月目初めての)	合	日)
五七日	(亡くなった日を含めて)	三十五日目)	
六七日	(”	四十二日目)
七七日	(”	四十九日目)
百ヶ日	(”	一〇〇日目)

亡くなった日から数えて四十九日までは七日毎に法要を営みます。

ご遺骨や、写真等を飾り、お寺様にお経をあげてもらいます。

忌日、七七日は特に近親者はもとより葬儀のときの世話人・近所の人などを招き読経の後、一同に茶菓子や、お膳などを供します。

忌日は「忌」の間のことでありまして、この日は特に神事、祝事を避ける日であります。仏教ではこの日を仏日として故人をまつり、また神道では十日毎に斎日を定めています。

七七日（忌明）

七七日の四十九日をもって中陰（仏説に人が亡くなってから七七日の生命は現生と後生との中間にあつて陽に出でずして陰に潜んだ存在であるといわれております。その間は未来の住所の定まらぬ間のことであるのでこの間よく法要して行くところへ行かむるというので聖武天皇の頃から行われたということです）としこれで忌日が一応終わったとします。

この日は仏まつりを一応終わる日で親族や親しい人を集めて法要を行います。参列する人の服装は地味でさえあればよく、供え物をもって行くのが通例であります。

満中陰の法要では施主側から一応挨拶を述べるのですが、難しいことを述べる必要はありません。

四十九日法要挨拶例

本日はよくお参り下さいました。葬儀の際はいろいろとお世話になりました。皆様のお陰をもちまして滞りなく満中陰をつとめさせていただきました。皆様のご厚情に故人もさぞかし満足していることと存じます。本日は誠にありがとうございました。

お骨納め

ご遺骨は満中陰まで自宅でおまつりし忌明け法要のあとはお墓に埋骨します。(お骨の一部を分けて宗派の本山等へ分骨なさることもあります。)

お墓が遠方にあるためにすぐに行けないとか、墓所を新たに求める場合など、喪家の事情によっては、ひとまず寺院等に預かっていただくか或いは自宅に引き続いて安置して、墓地、墓石の完成とともに埋骨することもあります。

埋骨のときは、親族・知人に通知してお集まりいただき墓前で簡単な式(仏式では読経と焼香)をして心から冥福を祈って納骨し、終わってから皆さんの労をねぎらって会食をなさるのが通例です。

年回忌

仏式の年回忌は、死亡の翌年から特定の年の故人の祥月命日に法事を営み、故人を偲ぶならわしのことです。先祖の仲間入りをなさった故人に対してご先祖と共にその冥福をお祈りしましょう。

- | | | | | |
|-----|----|--------------------|----------|-----------|
| 一 | 周忌 | (亡くなった翌年 | 一年目の命日) | |
| 三 | 回忌 | (亡くなった年を含めて三年目の命日) | (一周忌の翌年) | |
| 七 | 回忌 | (| 〃 | 七年目の命日) |
| 十三 | 回忌 | (| 〃 | 十三年目の命日) |
| 十七 | 回忌 | (| 〃 | 十七年目の命日) |
| 二十三 | 回忌 | (| 〃 | 二十三年目の命日) |
| 三十三 | 回忌 | (| 〃 | 三十三年目の命日) |
| 五十 | 回忌 | (| 〃 | 五十年目の命日) |

特に、一周忌、三回忌は近親者と縁故者をお招きしますが、七回忌以降は近親者だけでおつとめなされることが多いようです。

「神式」の場合は一年祭、五年祭、十年祭、二十年祭、その後は十年毎に行われます。

「キリスト教」では一年目毎の昇天記念日に追悼ミサを行います。